

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	千葉県
-------	-----

I 学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	佐倉市立佐倉小学校								
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊学級	計	教員数
学級数	5	4	4	4	5	4	2	28	40
児童数	169	142	151	145	173	157	4	941	

II 研究の概要

1. 研究主題

一人一人の児童に、「確かな学力」を身につけさせるには、どうすればよいか。

2. 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

- 1年生 国語，算数，生活
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）
- 2年生 国語，算数，生活
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）
- 3年生 国語，算数，理科，社会
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）
- 4年生 国語，算数，理科，社会
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）
- 5年生 国語，算数，理科，社会
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）
- 6年生 国語，算数，理科，社会
（「確かな学力」を身につけさせる基礎となる教科であるため）

(2) 年次計画

平成 14 年度	○テーマ	一人一人の児童に、「確かな学力」を身につけさせるには、どうすればよいか。
	○仮説	
	仮説1	基礎的・基本的な事項を洗い出し、授業の中で繰り返し指導していけば、「確かな学力」が身につくであろう。
	仮説2	「学び方」の習得ができれば、自ら学び、問題を解決する能力が育ち、「確かな学力」が身につくであろう。
	仮説3	指導形態を工夫し、教科や単元・題材にあった学習の場を設定していけば、「確かな学力」が身につくであろう。
	○研究内容・方法	
	1. 研究に対する基本計画	
	(1) 概要	

- ① 研究主題を掲げ、学校全体で年間を通して取り組んでいく。
- ② 各教科・領域および教育課程等、本校としての課題を考え、幅広い視点からの研修を行う。
- ③ 学年会や教科研修部会等における教材研究・教材準備等を充実させ、日常の各教科・領域の実践に生かすよう努める。

本校では、算数の学習において、平成5年度から11年度まで4年生を中心とし、チームティーチングを実施してきた。そして、平成12年度は4年生を、13年度は1年生を各学級二分し、2人の教師が別々に教える少人数指導も行ってきた。このことにより、きめ細かな指導を行うことができた。

また、平成13年度は5、6年生で学級間交流授業（2学級間による教科担任制）を行った。交流授業を行うことにより担当教科において、より詳しく教材研究を行うことができ、児童への指導を充実することができた。お互いの交流が教科内容の指導のみならず、生徒指導においても役立った。

平成14年度の研究では、前年度までの成果をふまえて、五教科（国語、社会、算数、理科、生活）を中心に、下記の3つの視点から研究を進め、一人一人の実態に応じた指導を通して、確かな学力向上をめざす。

(2) 本年度の重点課題

- ① 少人数指導・教科担任制・チームティーチングの充実を図る。

1～3年生では、算数を中心として少人数指導を展開し、理解や習熟度に応じた指導を通して、基礎学力の充実を図る。4年生以上では、教師一人一人の得意分野を生かした教科担任制を進め、児童一人一人の興味関心を高め、重点化を図る。チームティーチングは、全学年で実施する。

- ② 基礎学力を身につけさせる指導法の研究を行う。

国語、社会、算数、理科、生活において、各学年の基礎となるべき内容を明確にし、確実な力となるよう、問題解決的学習や習熟度別学習など、指導法の改善を図ると共に、指導過程の工夫や日課時程等を検討する。

- ③ 指導と評価の一体化を図る。

全学年を通して、児童の学力評価を生かした評価場面・評価方法などの多様な評価を工夫することにより、指導の改善を図っていききたいと考える。

上記の3つの視点から研究を進め、一人一人の実態に応じた指導を通して、確かな学力向上をめざしていく。

(3) 研修推進の柱

本年度の研修の方向としては、五教科（国語、社会、算数、理科、生活）を中心に、指導体制の工夫（少人数指導、教科担任制、チームティーチング）や指導法の工夫、指導と評価の一体化（多様な評価）について取り組んでいくものとする。

2. 先行研究の調査（先進校、文献研究）

- ・ 先進校の実践と課題の研究

3. 実践研究

- ・ 指導体制の工夫（少人数指導、教科担任制、チームティーチング）
- ・ 指導方法の工夫

・指導と評価の一体化（多様な評価）

4. 平成14年度の反省と次年度教育課程の立案

- ・本年度研究の評価
- ・児童の変容についての評価
- ・本年度の教育課程の問題点についての分析・研究
- ・来年度の教育課程の編成

平成
15
年度

○テーマ 一人一人の児童に、「確かな学力」を身につけさせるには、どうすればよいか。

○仮説

- 仮説1 基礎的・基本的な事項を、授業の中で繰り返し指導していけば、「確かな学力」が身につくであろう。
- 仮説2 「学び方」の習得ができれば、自ら学び、問題を解決する能力が育ち、「確かな学力」が身につくであろう。
- 仮説3 指導形態を工夫し、教科や単元・題材にあった学習の場を設定していけば、「確かな学力」が身につくであろう。

○研究内容・方法

1. 研究に対する基本計画

(1) 概要

- ①研究主題を掲げ、学校全体で年間を通して取り組んでいく。
- ②各教科・領域および教育課程等、本校としての課題を考え、幅広い視点からの研修を行う。
- ③学年会や教科研修部会等における教材研究・教材準備等を充実させ、日常の各教科・領域の実践に生かすよう努める。

平成15年度の研究では、前年度までの成果をふまえて、五教科（国語、社会、算数、理科、生活）を中心に、下記の4つの視点から研究を進め、一人一人の実態に応じた指導を通して、確かな学力向上をめざす。

(2) 本年度の重点課題

- ①基礎・基本を身につけさせる指導法の研究を行う。
国語科、社会科、算数科、理科、生活科において、各学年の基礎となるべき内容を明確にし、確実な力となるよう、指導法の改善を図ると共に、指導過程の工夫や日課時程等を検討する。また、発展的な学習や補充的な学習のための教材開発を行う。
- ②少人数指導・教科担任制・チームティーチングの充実を図る。
1～4年生では、算数科で少人数指導を展開する。5、6年生では、教師一人一人の得意分野を生かした教科担任制を進める。理解や習熟度に応じた指導を通して、基礎・基本の充実を図る。また、児童一人一人の興味関心を高め、重点化を図る。
- ③指導と評価の一体化を図る。
児童一人一人の学習状況を適切に把握し、その評価を生かして指導の改善を図っていく。
- ④年間指導計画の作成
国語科、社会科、算数科、理科、生活科において、授業実践を基に、

より本校児童の実態にあった年間指導計画を作成していく。

上記の4つの視点から研究を進め、一人一人の実態に応じた指導を通して、確かな学力向上をめざしていく。

<変更点>

- ・発展的な学習や補足的な学習のための教材開発を行うこととした。
- ・より多くの児童に効果的な指導を行うために、算数科少人数指導を、今年度は4年生でも行うこととした。
- ・より授業をしっかりとしたものにするために、各教科の「基礎・基本」や「評価規準」を入れた年間指導計画の作成を行うこととした。

(3) 研修推進の柱

本年度の研修の方向としては、五教科（国語、社会、算数、理科、生活）を中心に、指導体制の工夫（少人数指導、教科担任制、チームティーチング）や指導法の工夫、指導と評価の一体化（多様な評価）について取り組んでいくものとする。

2. 先行研究の調査（先進校、文献研究）

- ・先進校の実践と課題の研究

3. 実践研究

- ・指導体制の工夫（少人数指導、教科担任制、チームティーチング）
- ・指導方法の工夫
- ・指導と評価の一体化（多様な評価）

4. 地域公開を通して、広く意見を求める。

<変更点>

- ・本校の実践を地域に広め、次年度の研究のために、地域公開を行うこととした。

5. 平成15年度の反省と次年度教育課程の立案

- ・本年度研究の評価
- ・児童の変容についての評価
- ・本年度の教育課程の問題点についての分析・研究
- ・来年度の教育課程の編成

平成
16
年度

- テーマ 一人一人の児童に、「確かな学力」を身につけさせるには、どうすればよいか。
- 仮説
仮説1 基礎的・基本的な事項を、授業の中で繰り返し指導していけば、「確かな学力」が身につくであろう。
仮説2 「学び方」の習得ができれば、自ら学び、問題を解決する能力が育ち、「確かな学力」が身につくであろう。
仮説3 指導形態を工夫し、教科や単元・題材にあった学習の場を設定していけば、「確かな学力」が身につくであろう。

○研究の内容・方法

平成16年度は、学校分離のため児童数も教員数も減ることになる。
これまでの2年間の成果をふまえて、実践を行っていく。

1. 平成16年度実践研究

- ・指導体制の工夫（少人数指導，習熟度別指導，教科担任制，チームティーチング）

少人数指導：1，2年生

教科担任制：5，6年生合同で行う。

- ・指導方法の工夫（国語科，社会科，算数科，理科，生活科）

1，2年生 国語科，算数科，生活科

3，5年生 国語科，算数科，社会科

4，6年生 国語科，算数科，理科

- ・指導と評価の一体化（多様な評価）

- ・地域人材の活用

- ・「教科」と「総合」との関連を図った授業

2. 地域公開を通して，広く意見を求める。

3. 平成16年度の研究計画の見直し

- ・本年度研究の評価

- ・児童の変容についての評価

- ・本年度の教育課程の問題点についての分析・研究

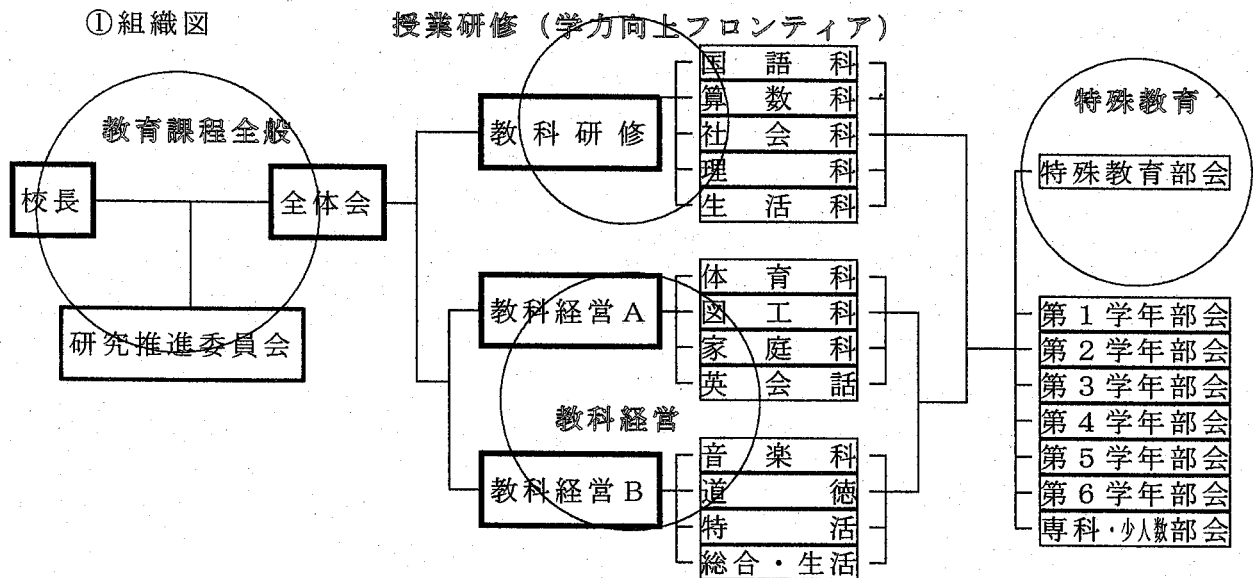
- ・来年度の教育課程の編成

4. 研究のまとめ

- ・収集データのまとめと仮説の検証

(3) 研究推進体制

①組織図



※教科研修の「生活科」担当は，教科経営Bの「総合・生活」も兼ねる。

②学力向上フロンティア研修図

「確かな学力」を身につけさせるために

基礎・基本の確実な定着
(読み書き計算の力, 学習意欲, 思考力, 判断力, 表現力, 問題解決力の育成)

個別指導, 繰り返し指導, 観察・実験, 調査・研究, 発表・討論
などの体験的・問題解決的な学習を取り入れた指導の充実

国語科 算数科 理科 社会科 生活科

基礎的・基本的な事項

「学び方」の習得

習熟度別学習

少人数学習, TT

TT (社会人活用含)

教科担任制 (交換授業)

ドリル学習

補充的な学習

発展的な学習

総合的な学習

読み書き計算

日記作文

ドリル時間

プリント教材の開発

朝の読書

読み聞かせ

学習環境の整備

本校の取り組み

- ③全体会
 活動内容 ○研究全体や教育課程に関することを協議し、方向を確認していく。
 構成員 全教員
 活動日 ○年間6回
 ○必要に応じてメンバーを召集して実施することができる。
- ④研究推進委員会
 活動内容 ○研究全体に関する企画
 構成員 校長，教頭，教務主任，副教務主任，研究主任，研究副主任，
 国語科主任，社会科主任，算数科主任，理科主任，生活科主任，
 総合学習主任
 活動日 ○年間10回
 ○必要に応じてメンバーを召集して実施することができる。
- ⑤研究運営委員会
 活動内容 ○本研究の運営や授業研修についての話し合いを行う。
 構成員 研究推進委員会のメンバーと運営委員（教育委員会指導主事，他校の
 先生方）
- ⑥教科研修部会
 活動内容 ○5教科（国語科，算数科，社会科，理科，生活科）に関する計画・
 運営，指導・支援の検討
- ⑥教科経営部会（教科経営A部会，教科経営B部会）
 活動内容 ○主に教科経営に関する事項について活動する。
 ○総合学習については，各教科との関連から授業研を行う。

本 年 度 の 研 究 概 要

- ア 主題を掲げ，学校全体で年間を通して取り組んでいく。
 イ 各教科・領域および教育課程等，本校としての課題を考え，幅広い視点から
 仮説を設定し，その検証を図る。
 ウ 学年会や教科研修部会等における教材研究・教材準備等を充実させ，日常の
 各教科・領域の実践に生かすよう努める。

【本研究の重点課題】

- ア 基礎・基本を身につけさせる指導法の研究を行う。
 国語科，社会科，算数科，理科，生活科において，各学年の基礎となるべき
 内容を明確にし，確実な力となるよう，指導法の改善を図ると共に，指導過程
 の工夫や日課時程等を検討する。また，発展的な学習や補充的な学習のための
 教材開発を行う。
- イ 少人数指導・教科担任制・TTの充実を図る。
 1～4年生では，算数科で少人数指導を展開する。5，6年生では，教師一
 人一人の得意分野を生かした教科担任制を進める。TTは，全学年で実施する。
 理解や習熟度に応じた指導を通して，基礎・基本の充実を図る。また，児童一
 人一人の興味・関心を高め，重点化を図る。
- ウ 指導と評価の一体化を図る。
 児童一人一人の学習状況を適切に把握し，その評価を生かして指導の改善を
 図っていく。

上記の3つの視点から研究を進め，一人一人の実態に応じた指導を通して，
 確かな学力の向上をめざしていく。

【研究仮説】

仮説1 基礎的・基本的な事項を、授業の中で繰り返し指導していけば、「確かな学力」が身につくであろう。

<基礎的・基本的な事項の繰り返し指導，徹底>

- ・基礎的・基本的な事項の習熟
- ・発展的な学習の指導，補充的な学習の指導
- ・個に応じた指導
- ・プリントなどの教材作成・開発，教具づくり
- ・ドリルの活用方法，ドリル学習の位置づけ
- ・視聴覚機器の活用（ビデオ，OHP，実物投影機，パソコン）

仮説2 「学び方」の習得ができれば，自ら学び，問題を解決する能力が育ち，「確かな学力」が身につくであろう。

<「学び方」の習得>

- ・問題解決的な学習
- ・学習の進め方（ノートを使い方），学習のルール
- ・ワークシートの活用の仕方
- ・ドリル学習の位置づけ（基礎・基本と学び方の割合）

仮説3 指導形態を工夫し，教科や単元・題材にあった学習の場を設定していけば，「確かな学力」が身につくであろう。

<指導形態の工夫，指導方法の工夫>

- ・個別，一斉，グループ指導
- ・少人数指導（算数：1～4年生）
- ・教科担任制（交換授業：社会科，算数科，理科：5，6年生）
- ・学年内TT（1～6年生）
- ・社会人活用TT（社会科，理科，生活科：全学年）
- ・習熟度別指導（算数科：1～4年生）
- ・教室内や校内の学習環境整備

【各教科部会における仮説の具体的な手だて】

上記の仮説に基づき，各教科研修部会ごとに具体的な手だてを立てて，授業研修を通して，実践的に研究してきた。

<国語科部会>

仮説1について

- ・「基礎的・基本的な事項」に関する活動に、児童が繰り返し取り組むことができるように授業を組み立てた
- ・正課時間外でも基礎的・基本的な事項を継続的に指導できるよう、日常生活における国語指導の場の工夫をした

仮説2について

- ・その単元において児童につけさせたい力を主体的に学ばせるため、見通しがもてる学習課題を設定し、目標意識や相手意識を持って活動していけるようにした
- ・ねらいに沿った学習活動ができるよう、モデルを具体的に示し、児童が主体的に学習していけるようにした
- ・学習課題への取り組みについて、流れや成果が振り返ることができるようなノート指導を行った

仮説3について

- ・児童が充実感をもつことができるような場の設定を工夫した
- ・児童が活用できる場を工夫した

<算数科部会>

仮説1について

- ・指導のポイントを明確化する
- ・実態調査を行う
- ・基礎・基本の定着を図る

仮説2について

- ・様々な解決方法を身につける
- ・生活に根ざした算数的活動を取り入れた、楽しく主体的な学習を展開する
- ・基礎・基本の力を高める学習過程を工夫する

仮説3について

- ・学習内容により、指導形態を工夫する
- ・少人数の指導形態を工夫する（1～4年生）
- ・T T方式による指導形態を工夫する
- ・コンピューター、V T R等の教育機器を活用
- ・算数コーナー、課題選択コースを設定
- ・題材にふさわしい学習場所の設定（運動場、体育館など）

<理科部会>

仮説1について

- ・年間指導計画への基礎的・基本的な事項を明記
- ・用具、器具の正しい使い方の習得
- ・安全意識の定着
- ・指導と評価の一体化
- ・思考面での繰り返し
- ・既習事項の振り返りの習慣化

仮説2について

- ・発達段階に応じた資質能力の育成
- ・自作教具の活用
- ・学習過程の明確化（ノート指導）

- ・ 定型文の活用
 - ・ 既習・生活経験の活用
- 仮説 3 について
- ・ 児童一人一人が生きる実験形態の工夫
 - ・ 理科学習の場の機能的活用
 - ・ ものづくりを通じた探求心の育成と理解の定着
 - ・ 選択, 発展的学習の場の設定

< 社会科部会 >

仮説 1 について

- ・ 資料の活用能力を高める
- ・ ワークシートや白地図の効果的な活用
- ・ 社会科学習に関する環境の整備
- ・ 地域人材の活用

仮説 2 について

- ・ 問題解決的学習の流れを児童が理解し, 学習の見通しが持てるようにする
- ・ 情報収集の手段・方法を児童が習得できるようにする
- ・ 学習したことに関して, 児童が自分の意見を持てるようにする

仮説 3 について

- ・ 外部人材の活用
- ・ 体験; 施設見学の重視
- ・ 効果的な資料の展示方法を工夫する
- ・ 指導形態の工夫
- ・ 学習形態の工夫

< 生活科部会 >

仮説 1 について

- ・ 具体的な活動と体験の設定の工夫

仮説 2 について

- ・ 個に応じた教師の支援

仮説 3 について

- ・ 学習の場の工夫

III. 平成 15 年度の成果及び今後の課題

研究主題を掲げ, 仮説を設定し, 5 教科における授業実践を中心に研究を進めてきた。

1. 研究の成果

(1) 国語科

○ 仮説 1 について

- ・ 単元における基礎的・基本的な事項を明確にしたことで, より焦点化した授業の構成を行うことができた。
- ・ 正課時間外でも掲示物などを利用し, 継続して指導することができた。
- ・ 活動の観点を意識できるようなカードや掲示物を作成したことで, 児童が必要な時にいつでも振り返ることができた。繰り返し活用していくことで他者への評価も表面的なことではなく, めあてに沿ったアドバイスが多くなった。
- ・ 「漢字確実くん」を導入したことで繰り返し漢字の学習に取り組む機会となった。また, より積極的に漢字を習得しようとする姿が見られるようになった。

○仮説2について

- ・児童の興味を引き出せるような構成を工夫し、目的意識を持たせることで、児童は意欲的に活動することができた。
- ・相手意識を持たせることで、相手に応じた内容や発表方法を選択する必要性が生まれ、学習に深まりがみられた。
- ・モデルを示すことで児童は学習の見通しをもって活動することができた。何に気をつけて活動していくかということ把握させていくうえで効果的であった。
- ・流れや成果を振り返ることができるようなノート指導を行うことで、高学年では、児童自身が加除訂正を行えるようになってきた。授業での友達の発言やアドバイスなどを書き込み、次の学習に生かせるようになった。

○仮説3について

- ・発表の場を異なる学年に広げたり、グループの組み方や様々な発表形式を工夫したりすることで、児童に多様な表現方法を学ばせ、意欲や達成感をもたせることができた。このことは、相手の立場や自分の立場をはっきりさせて話したり、表現の効果を考えたりするためにも有効であった。

(2) 社会科

○仮説1について

- ・資料を繰り返し読み取らせていく時間を確保していくように努力してきた。その結果、一つのグラフや表からも気づいたことやわかったことを見つけることができるようになってきた。また、集計したワークテストの点数を分析すると「技能・表現」の点数に伸びが見られた。
- ・ワークシートや自作テストを作成し、活用していくことができた。
- ・6年生では新聞の記事を読んでわかったことを書き、自分の意見をまとめていくという作業を繰り返し行ってきた。それによって、様々なできごとに対して自分の意見を持つことができるようになってきた。
- ・2棟3階や5年生教室前の掲示板に、最新のニュースを新聞から切り抜き掲示し、児童が見ることができるようにした。また、その新聞の切り抜きを世界地図や日本地図の上に掲示することにより地理的なことにも興味を持たせることができた。
- ・地域の施設に児童が繰り返し見学に行く機会を設け、課題を調べることができた学級もあった。また、地域の「時代祭り」という行事に積極的に参加したり、国立歴史民俗博物館に繰り返し調べ学習に行ったりする児童も出てきた。

○仮説2について

- ・児童が情報を収集するためのいろいろな方法（インターネットの活用・インタビュー・手紙の活用など）で調べられるようになってきた。また、調べる内容によって、本やインターネット、インタビュー形式など、どの調べ方がよいかを選択できるようになってきた。また、児童へのアンケートを分析しても、児童はある課題を調べる時にいろいろな方法を思い浮かぶことができるようになってきているようだ。
- ・児童が様々な方法で調べたことを、ただ写すのではなく、自分の言葉でまとめることができるようになってきた。また、経験や学習したことから、自分なりに意見や感想も言えるようになってきた。また、疑問や追求したい点について授業以外でも、図書館やインターネットで意欲的に調べることができる児童も出てきた。
- ・調べたことを発表する段階では、多様な方法で発表できるようになってきた。例えば、役割分担を決めてのインタビュー形式、劇、クイズ形式、紙芝居形式

などの方法である。

- ・また、インタビューの仕方やメモの取り方などの方法を文書にまとめ資料として残していくことができた。
- ・学習の流れについて社会科部会の中で確認し、教師が意識して授業を進めることができた。

○仮説3について

- ・外部人材を活用した授業を行うことが増えてきた。その結果、児童の意欲を引き出すことができたり、より専門的な方の話を聞くことにより課題を解決したりすることができた。また、外部人材の方も前年度に引き続き来てくださる方が多く打ち合わせがスムーズにできるようになってきた。また、外部人材の方も子どもへの接し方に慣れ、より児童にわかりやすく話をしていただけるようになってきた。
- ・施設見学に行く回数がさらに増えてきた。その結果、児童は実際に見たり聞いたりしながら課題を解決することができるようになった。
- ・様々な体験活動を授業に取り入れていく回数が増えた。6年生では、土器作りや戦争の学習でのすいとん作りなどを行うことにより、児童は興味を持って学習に取り組むことができた。
- ・授業の中で児童へ資料を提示する方法を工夫し実践してきた。資料を拡大しての提示やプロジェクターを使っての提示、実物や模型を使っての提示など様々な方法を試みることができた。
- ・高学年で教科担任制を取り入れることにより、教材研究や資料の準備を、より深く行えるようになってきた。
- ・各学年とも、単元によって一人調べやグループ調べなどの学習の形態を使い分けながら授業を進めることができた。
- ・社会科資料室を整備していくことができた。

(3) 算数科

○仮説1について

- ・年間指導計画に単元の基礎・基本を明記したことで、単元の基礎・基本を意識し、自力解決やまとめの時に支援がしやすかった。
- ・実態調査の結果から、よくわかっていないところがわかり、前年度、前々年度にさかのぼり、毎時間はじめの5分で復習する単元もあった。単元終了後に同じ問題を調査すると、ほとんどの児童が正しく答えることができた。
- ・計算プリントの活用で、力がついてきた児童が増えてきている。(休み時間にやりに来たり、丸付けに来たりする児童も見られた)。
- ・(数図ブロックの並び等) 先々までの指導の一貫を考えて、指導できた。

○仮説2について

- ・ノートのまとめ方は、自分の考えをつけ足して書くなど、だいぶ身につけてきている。
- ・筆算のときには定規を使用するなど、学習のルールは定着してきた。
- ・前時との違いを常に考えさせる授業を心がけた。
- ・具体物を使ったり、体を動かしたりする体験的な算数的活動を多く取り入れたことにより、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・学習パターンを次時へ生かしていった。
- ・授業の最後に、わかったことや感想などを書くことにより、自己評価能力の向上や、授業改善が図れた。

○仮説3について

- ・少人数やTTにより、一人一人に目が届き、ノートを見たり、つぶやきから授業を展開した

りすることもでき、子どもたちのやる気が違ってきた。

- ・単元によって指導形態を工夫できた。
- ・学習内容により、一斉指導、課題別グループ指導を組み合わせることで効果的な学習を行うことができた。

(4) 理科

○仮説1について

- ・ガイドブックを活用し、実験用具・器具の使い方を繰り返し確認したことにより、児童自ら正しい使い方を習得することができた。
- ・薬品や器具の使い方の指導では、年間指導計画の中に指導時間を確保し、授業の中で繰り返し指導をしたことで、安全意識の定着を図ることができた。
- ・一授業時間内での評価の観点を絞り、具体的な判定基準を持って評価にあたったことで、児童の思考の流れや学習活動を今まで以上に把握できるようになり、適切な支援にもつながった。
- ・一度の実験の結果だけでなく何度も繰り返し試すことで確かな検証結果を得ることができた。

○仮説2について

- ・発達段階に応じた資質・能力が徐々に育ってきたことにより、児童自ら学ぶ意欲が向上した。
- ・観察における観点を明確化したことで、多くの児童に理科的な観察方法が定着した。動植物の変化や成長をより具体的に実感できるようになったことで、飼育・栽培に対する意欲が向上し、動植物を大切に思う心情も養われた。
- ・ノート指導を通して学習過程を明確化したことにより、児童が一時間の授業に見通しが持てるようになった。特に高学年では、問題解決の場面で、予想と観察・実験結果の一致や不一致を明確にしたり、自己の考えを見直したりする態度が身についた。
- ・定型文によるまとめは、3学年から十分取り組むことができ、学習意欲の向上につながった。また高学年では、ヒントを使わず、自身の言葉でまとめが書けるようになった。
- ・学習内容・学習場面に応じた自作教具を授業の中で活用することにより、意欲の向上及び理解の定着を図ることができた。

○仮説3について

- ・理科室の環境整備をしたことにより、準備や後かたづけまでを児童自身の手でできるようになり、場の機能的活用を生かすことができた。
- ・廊下掲示は児童にとって効果的であった。学習の流れを確認するだけでなく、観察カードなど友達の優れた学習の成果を目にすることで、自分の学習にも生かす姿が見られた。
- ・視聴覚機器の活用により、目に見えない自然の事象を効果的に提示することができ、児童の学習意欲の向上につながった。
- ・学習形態を工夫することにより、自ら進んで観察・実験を行い、知識や理解の定着が深まった。
- ・ものづくりを学習の中に設定したことで、学習のまとめとして獲得した知識や技能を活用することができたとともに、学習の成果を日常生活に生かすきっかけにすることができた。

(5) 生活科

○仮説1について

- ・児童の実態を活かした教材作りや児童の思いや願いが実現できる体験活動を多

- く取り入れたことで、児童の活動意欲を最後まで持続させることができた。
- ・児童が身近な人・社会・自然と繰り返し関わる活動を大切にすることで、児童のものの見方・考え方が深まってきた。

○仮説 2 について

- ・児童の実態を把握し、一人一人にめあてをもたせたことで、児童が見通しをもって活動できるようになった。
- ・児童が自分の思いや願いが実現できるように、発達段階を追いながら基礎的な表現力をつけていく活動を繰り返すことにより、児童が自信をもって表現できるようになってきた。
- ・子どもたちどうしがお互いの活動を見合い、よりよくするための手立てを出し合ったり、良いところを認め合ったりする活動を通して、自分たちで問題を解決していこうとする意識が生まれた。

○仮説 3 について

- ・単元の導入を工夫することで、児童に活動への興味・関心を引き出すことができた、次の活動への意欲を持続させることができた。
- ・学年 T・T や学習ボランティアの協力を得たりすることで、児童の多様な活動へのきめ細かな支援をすることができた。
- ・活動の場を広げたことで、児童の学習意欲の向上につながった。

(6) 研究全体

①教師が変わった。そして、児童が変わってきた。

- 児童の基礎・基本を育てると同時に、教師の基本も大切にすることができた。
- 教師の意識が高まり、教材研究をしっかりと行い、単元・時間で押さえるべきポイントを明確にして授業を行った。
 - ・児童の実態把握によって、個に応じた学習ができた。
 - ・導入を工夫することにより、学習意欲の向上がみられた。
 - ・様々な体験的活動を重視することにより、学習意欲の向上がみられた。
 - ・1年生の時からきちんとしたノート指導を行い、「学び方」を習得させることができた。
- 実態調査から、各教科ともに嫌いという児童が減り、好きという児童が増えてきた。
 - ・積極的に発表しようとする姿勢がみられた。
 - ・進んで自力解決できるようになってきた。
 - ・各教科なりの様々な表現活動ができた。

②一人の児童に、たくさんの教師や人が関わり、よりよく育てていくよう努力した。

- 少人数指導、チームティーチング、教科担任制、社会人活用などを行うことにより、様々な場の設定ができ、児童の多様な活動へのきめ細かな指導、支援をすることができた。また、児童を違った角度で見ることができた。

③学習環境が整ってきた。

- 実態にあったプリント、ワークシートの作成ができた。
- 環境（教室掲示や資料室、廊下掲示等）が新たに整備されてきた。

2. 今後の課題

(1) 国語科

○仮説1について

- ・児童の変容をつかみ、次時への活動へ生かしていけるよう評価についてさらに考えていく必要がある。

○仮説2について

- ・児童が互いの表現力を高め合う相互評価ができるような手立てを工夫していく必要がある。

○仮説3について

- ・単元を通して児童につけたい力を、個の実態に応じて明確に捉え、より効果的な学習の場を工夫していく必要がある。

(2) 社会科

○仮説1について

- ・社会科学習における基礎的・基本的事項を、どの単元でどの程度まで確実に指導していくのかについて十分検討し、実践していくことができなかった。
- ・地域の教材を取り扱う機会を増やしてきたが、佐倉市で取り組んでいる「佐倉学」との関連も考え、さらに地域との結びつきを深めていきたい。

○仮説2について

- ・学習の流れがわかり、見通しが持てるまでの力をどの学級でも児童に十分身につけさせたとはいえない状態である。
- ・情報収集に関して、インタビューの仕方や見学メモの取り方などの技能をさらに高めるため、今後も今年度作成した資料を改善しながら、マニュアル的な物の作成についても検討していきたい。

○仮説3について

- ・外部人材の方との打合せの時間を確保し、教師側の意図する点について十分伝わるように努力していきたい。
- ・高学年における教科担任制の際の時数の確保について考えていきたい。

(3) 算数科

○仮説1について

- ・他学年のプリントも廊下等に用意し、幅広く、自分の力に応じて学習が進められるとよかった。

○仮説2について

- ・話し合いの視点が明確にできなかった。
- ・掲示物やヒントカードの準備が不十分であった。
- ・単元ごとに少人数の編成を変えていたので、評価方法については、今後さらに検討を加えていく必要がある。

○仮説3について

- ・課題選択コースがあまり設定できなかった。
- ・より効果的な少人数指導、習熟度別指導、TT指導については、これからも考えていかなければならない。
- ・数と計算領域以外でも繰り返し練習のできるプリントを作成していった方がよいかもしれない。

- ・少人数指導のグループの分け方については、さらに考えてきたい。
- ・習熟度別指導の効果を保護者に伝えていく必要がある。

(4) 理科

○仮説1について

- ・各学年、各单元において具体的判定基準の設定を継続して行い、年間指導計画とともに活用できるように取り組んでいきたい。また、各時間の評価を单元全体の総括的評価にどのようにつなげていくかについても研修を深める必要がある。
- ・ガイドブックについては内容を精選し、学年の枠を超えて児童が使いやすいようにしていきたい。

○仮説2について

- ・学習過程を身につけさせるためにノート指導に取り組んだ結果、今後は表現力の向上にも努めていかなければならないと感じた。
- ・定型文によるまとめは、児童が自分の言葉で記述するため、授業後に教師が準備した適切なまとめ文を児童のノートに添付したり、まとめ文に必ず盛り込むべきキーワードを提示したりするなどの支援を今後も継続して行う必要がある。
- ・生活経験との結びつきをもっと意識した指導を行わなくてはならない。

○仮説3について

- ・選択学習においては、課題を選択するまでの過程に重点を置き、主体的な選択ができるよう研修を深めていきたい。
- ・交換授業を行うだけでなく、T・T指導や少人数指導などを導入し、さらに指導の形態を工夫していきたい。

(5) 生活科

○仮説1について

- ・五感を通したいろいろな活動をより充実させるために、日常生活の中で関わりをもたせていきたい。

○仮説2について

- ・学年TTや学習ボランティアなど学習形態が変わることで、一人一人の児童を見とる手立てについて、さらに研修を深めていきたい。
- ・さらに児童の表現力を伸ばすために、教師の多様な支援の仕方を考えていきたい。

○仮説3について

- ・学校・家庭・地域を通し、人との関わりを広げてきたが、ひとりひとりがより深く関われるような活動を設定していきたい。

(6) 研究全体

- 実態調査をもとに、一人一人の児童にあった指導、支援や評価のあり方をさらに検討していく。
- 様々な教科における少人数指導やTT、教科担任制の取り組みについても検討していきたい。
- より効果的に指導していくことができるようなプリントなどの補助的な教材、教具を開発していく。
- 各教科部会での成果を、より多く学年内に広めていく。

IV. 学力把握のための学校の取組について

- 3年間を通して同じ調査用紙(テスト)を使用し、学年ごとに集計し、比較検討する。
- ・各教科とも単元終了後にテストを行い、テストの結果を普段の指導に生かす。
 - ・各教科の観点別、学年別に1年間の調査結果を比べ、学力を把握し、指導に生かす。

V. フロンティアスクールとしての研究成果の普及

○学力向上フロンティアスクール公開研究会

目的 研究2年目にあたる本年、取り組みの途中で、研究・授業の公開を行い、地域に広めるとともに、広く意見を求める。

期日 平成16年2月17日

日程 12:20~12:40 受付
12:40~13:20 全体会(研究発表)
13:35~14:20 公開授業
14:40~16:10 分科会(5分科会)

公開授業 国語科、社会科、算数科、理科、生活科の5教科

○来年度も公開研究会を行う予定である。(平成16年11月12日を予定)

○研究成果普及のためにホームページに研究成果等をいれ、地域に発信していく。

◇ 次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】 15年度からの新規校 14年度からの継続校

【学校規模】 6学級以下 7~12学級
 13~18学級 19~24学級
 25学級以上

【指導体制】 少人数指導 T.Tによる指導
 一部教科担任制 その他

【研究教科】 国語 社会 算数 理科
 生活 音楽 図画工作 家庭
 体育 その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】 有 無